

20th International
AIDS Conference
Melbourne, Australia
July 20-25, 2014



メルボルン国際エイズ会議報告レポート
2014

20th International AIDS Conference

Melbourne, Australia
July 20-25, 2014



SWASH
Sex Work And Sexual Health

mail.swash@gmail.com
http://swashweb.sakura.ne.jp/
twitter: @swash_jp
facebook:
www.facebook.com/sexwork.swash



はじめに

SWASH は、第 6 回アジア太平洋地域エイズ国際会議(メルボルン 2001 年)から、2002 年、2006 年、2008 年を除いて、ほぼ毎年国際エイズ会議に参加させてもらっています。

その年によって様々な公的役割や目的があり、発表だけでなく、セックスワーカー(以下、SW)のセッションや交流会のオーガナイズをさせてもらったり、文化プログラム準備のお手伝いなど、積極的に関わってきました。こんなに毎年国際エイズ会議に参加している日本の NGO もなかなかないかもしれません。

国際エイズ会議と、SW 団体の国際的なネットワークの関係や歴史については、最後のページで触れていますのでぜひ読んでみてください。

今年のメルボルンエイズ会議には、初めて国際エイズ会議に参加したメンバーが 2 名。セクシュアルマイノリティに関するセッションや報告が例年になく充実しているので注目してもらいたいところです。

また、メルボルンのエイズ会議終了後、自主的にシドニーに向かったメンバーが 2 名。セックスワーカーアクティビズムの聖地と言われるシドニーで活動するスカーレットアライアンスや SWOP の視察レポートも必読です!

このレポートを読んで頂いて、興味や関心を共有するメンバーがいたら、今後メンバーらの出演する講演・イベント情報を Web でチェックしてみてください。

- 「メルボルンエイズ会議報告～プラス、シドニーも見学してきたよ!～」
水嶋かおりん 2～5p
- 「WHOのエイズ対策のガイドラインに、初めてトランスピープルが入った!」
日本のエイズ対策も、これ以上トランスジェンダーを無視してはいけない。
大河りりい 7～8p
- 「世界の視点から客体化して見るセックスワーク」濱中洋平 9～10p
- 「第20回国際エイズ会議(メルボルン)雑感」東優子 11～13p
- 「もぎたて国際会議。その日の内に書かれたこと。撮ったもの」げいままきまき 14p
- 「セックスワーカーの人権国・ニュージーランドと豪、
買春者処罰の先駆け・スウェーデンはこんなに違う」要友紀子 15～16p
- 最後に～アンドリュウのこと～ 17～18p

メルボルンエイズ会議報告～プラス、シドニーも見学してきたよ!～

水嶋かおりん

メルボルンエイズ会議参加のテーマでは、「だれもおいていかない」というスローガンが掲げられました。主に私が感銘を受けたことは、私自身がセックスワーカーでもあるため、key-population (WHO が策定した世界の枠組みとしての「今後の HIV/AIDS の動向に関して変化をもたらす上で鍵となる人々」)の SW (セックスワーカー) コミュニティから提供された様々な分科会の様子、シドニーで取り組まれていた SW サポートサービスについて報告します。

「英語が話せない人にこそ発言の場を!」



まず、国際エイズ会議に先立ち世界 30 カ国の SW が参加したプレ会議が行われました。アドボカシー(政策提言)・ファンディング(資金調達)・メディカル(コンドーム使用ケアや新しい治療について)・マイグランド(移住労働者)・スティグマ(差別や偏見)をテーマにディスカッションが行われ私はメディカルグループに参加しました。

メディカルグループでは、コンドームエビデンス(セックスワークが犯罪化されている地域ではコンドームを証拠に逮捕される)に模した PrEP エビデンスが行われるのではないかと HIV 感染の予防に対してコンドームの使用に尽力していた SW コミュニティの中では「社会環境的予防策には逆効果!お客さんが SW にのみ予防策を期待しお客さんがコンドームの使用を拒否するのではないかと」ということが懸念されました。

そしてもう 1 つプレ会議の中で感銘を受けたことがありました。それは英語のわかる人々が主体となって物事を決めてしまうことに対して「英語が分からない人々にこそ発言する機会をもっと増やしていくことも必要だ」という意見がありました。そして、本会議での声明発表をあえて英語を母国語としない人が発表を行うことで言語の多様性について体現し、英語がわからない国やアサーティブ(主張)する力の弱い国の意見や情報共有が見通されてしまわないように!と訴えていました。SW コミュニティは、セックスワーカー一人一人の尊厳を考えようとする雰囲気非常に大切に、互いの背

景や弱さを尊重し思いやりを持った関係を築き家族のような存在としていることに非常に感銘をうけました。

国際会議で非犯罪化意識がより強まった!



医学雑誌
ランセット

SW コミュニティの取り組みは医学雑誌ランセットにセックスワークの非犯罪化が HIV 予防にとって急務であると報告されたことがエイズ会議の中でも注目されていました。社会環境の構築によって人命が守られることへの明確なエビデンスが提示されたと言っても過言ではないです。

スカーレットアライアンスのエレナさんは「私たちは我が強い人だから声をよくあげるけど世界のセックスワーカーは差別を受けているのです。世界の人々にも目を向けて下さい。ちゃんとしたセックスワークをすれば HIV 予防はうまくいきます。データによると 100 カ国以上はセックスワークが違法でセックスワーカーの 51%以上はちゃんと医療ケアを受けられていません。2011 年の UNAIDS で HIV を全滅させよう!もっと真剣に取り組もう!と示したけど多くの国々のセックスワーカーにそれが届いていません。非犯罪化されているニュージーランドやオーストラリアでは HIV 感染者数が違法の国よりも低いです。違法化されている国では警察や一般人から差別を受け人間としてそして労働者としての権利がちゃんと成り立っていません。権利が守られていないから正しい判断ができなくなるのです。セックスワーカーとしての差別を無くすためには非犯罪化をするのが第一歩です」と訴えました。

ピアエデュケーション

ガバナンストレーニングを受け、ピアエデュケーションのワークショップに参加し日本における現場講習の様子を報告しました。

「ピアエデュケーション」とは、SW 同士が自分の身を守ったり安全に働くための知恵を出し合う当事者同士の支援活動です。

また、セックスワーカーのために働きかけをしたいと

思っている活動家さんが警察や行政、司法や社会福祉などの関係機関にアプローチして教育をしていたり、レベルの高い人達は国を超えて情報交換をしたりコミュニティ形成のサポートをし合ったりしていました。

オーストラリアで合法、あるいは非犯罪化されている地域でのセックスワークではお客さんの性器周辺の状況をくまなくチェックして少しでも異常があれば断る対応をすることが可能だそうです。違法な地域であれば、初めに最期まで何をするかは言わずに接近しマッサージを提供し、サービスの途中からセックスワーカーが自らの性的興奮を覚えるようなことが好きだと話題を出して誘いをかけてチップをもらうそうです。法で裁かれないセックスワークはセックスワーカーが優位な立場に立てるためカラダのケアやメンタルのサポート、セックスワーカーに対する暴力への自衛力、安全性の向上を図るための当事者からの具体的なルールの提供、危険性やトラブル対応に対して警察に堂々と訴えることができます。また、社会保障や保険、労災認定を得るための組織作りも可能にします。

肉体的な安全だけではなく精神的、社会的安全の確保に繋がり、セックスワークを労働と認めることで守られる命の存在がある。ということを大いに学ぶ素晴らしい会でした。

ILO 国際労働機関



スカーレットアライアンスと ILO 国際労働機関の方などが参加したセッションでは、「セックスワークがまともな仕事じゃない、なんて言うけどまともな仕事かどうかは、どうしたらまともな仕事になるのか？と考えたところからまともな仕事である」という言葉に大変な勇気もらいました。「安心安全に働きたい」と思うのはどんな職業でも、どんな状況でも労働者が求める最低限のことなのでセックスワークに関係なく必要な尊厳だと思います。私は会の中で「日本におけるセックスワークの労働安全を求める働きかけは、人権主張が大きい面倒な人間として扱われ煙たがられる傾向にあり、そもそも日本の労働者の権利意識は低いので日本全体の労働者の権利意識への大きな働きかけが必要になる。」と意見したところ、「それならセックスワーカーが日本の労働者のために働きかけをすることでみんなの役に立ち、それからセックスワーカーの労働安全の問題について提言していく。日本の労働者のオピニオンリーダーになってはどうか？」という返答に大変な衝撃を受けました。

シドニー編 SWOP

SWOP(Sex Work Outreach Project)



SWOP は、セックスワーカーの安心と安全のために店舗や街娼の人々へ現場介入をし、ヒアリング、プロテクター（コンドームやゴム手袋）の無料配布などの働きかけをし、カウンセリング、法律相談、外国人労働者、メンタルケアなどの SW に関する人道的サービスを提供していました。また SWOP が所在するビルは、肝炎のサポート団体、HIV に関する団体、ドラッグユーザーへのハームリダクションサービスを提供する団体の施設でもあり、HIV に関する様々なサポートを一手に担っている施設 (A-CON) でした。

日本の東京では、エイズ予防財団を始め、ぶれいす東京、コミュニティセンター akta など HIV 関連団体と肝炎協会やドラッグユーザーサポートをしている団体はそれぞれ別々の活動をしているため、ギャザリングのような横のつながりがなかなか可視化されているように見えな気がします。それが、シドニーのように一つの建物の中に他のサポートをしている団体があることは共生関係を作る上では非常に有効的だと思いました。

しかし、サービスを受けたいと SWOP に来所された人にとってはプライバシーの保護を重視するための対処も考えなければならないので、SWOP は 2013 年から A-CON とは別の資金調達によって独立を果たしたことに より以前よりも活動の幅や多彩なプロジェクトが可能になったそうです。



A-CON のビルの中にはミーティングセンターというフロアがあり、HIV や感染症に関するサポート団体、行政、警察、ソーシャルワーカーとの勉強会やワークショップ等を行い、関係機関との連携や SW へ対する差別や偏見がないよう誰もが安心安全な環境を得られるよう SW のために働きかけをしています。

アウトリーチに同行する前に時間があつたので、キングクロス駅から少し歩いたところに SW が無料検査を受けられる「180 クリニック」を見学させていただきました。

セックスワーカーであれば無料で HIV や STI や子宮頸がんの検査を受けることができ、検査表も必要であれば出してくれるクリニックです。シドニーの娼館「プロセス」で働く時に検査表の提示を求められることもあるそうですが検査表の提示は強制ではないそうです。また、

目の前にいる人の健康ケアに対するアプローチを第一に考え、なんでも話せそうなフレンドリーなクリニックの存在にとても感銘をうけました。

日本において病院は病院、行政は行政、という縦割り型の社会構造になっているため横のつながりを作る存在が非常に大事でソーシャルワーカーや市民団体などがその役割を果たしてはいますが、その認知はまだまだ低く、専門性が高くなればなるほど市民の土壌に下がることが少ないため、日本において HIV のみに関わらず社会全体の構造の大きな課題だと思いました。

また、日本では「セクシャルヘルス」というもの自体が欠落しているように思うので、HIV や AIDS に関する取り組みを全ての人が共有することで生まれる社会資源や社会資材が非常に多くあるのではないかと私は期待を待ちました。

検査無料クリニック



アウトリーチでは、M、L、LL コンドームが 20 個（日本でワーカーが使用するのは S、M、L が主流）グローブ、デンタルダム（クニリングス用シート）、ループ（LUBE・ローション）、セックスワーカー向け冊子、悪いお客さん等の情報が載った冊子を各一人一人に配布しました。

同行させてもらった娼館は大きいお店で、長身でプロンドのショートボブヘアのお姉さんが店の中を案内して下さいました。ベッドだけのベッドルーム、入浴をする SPA ルーム、パーティールームなど、多彩なお部屋を用意しており他のお客様とのパッシングを防ぐために娼館の出入り口が何個か用意されているそうです。階段を上り下りしながら店内をぐるぐるしていたので自分の位置がどこにいるのかわからなくなるような素敵なお店でした。

店の中を案内してもらったあと一緒にさせていただいていた SWOP スタッフのシェルさんがキャストの方にお仕事グッズや冊子を一つ一つ紹介し、悪いお客さん情報の冊子のお話をしました。それをみた別のキャストの方が、「あ、私この人知っている！」と反応、名前、特徴、カラダつき、ペニスの特徴など細かな情報が書かれ、「そうそうこんなペニス！」という反応をしていらっやいました。日本でも待機場での情報交換が合えるお店では悪いお客さん情報が共有され危ないお客さんチェックがしやすくなることは多いですね。また、コンドームの話では、シェルさんが模型を出して口でコンドームを自然につけるデモンストレーションを見せて下さり楽しい雰囲気も醸し出されました。そして、日本から来た SWASH ことを紹介してくれました。

SWASH では日本語・中国語・韓国語・英語の 4 国語で書かれたパンフレットを発行しているの日本人を

SWOP アウトリーチ



始め東アジアの方が働きに来たら渡してほしいとお渡しさせて頂きました。パンフレットの説明で、日本では挿入を伴うサービスを非犯罪化していないのでフェイクセックスサービスを提供していると伝え、粘膜接触を抑えた素股のやり方を少しでしたがお礼に披露させて頂きました。内容は、「脚の付け根の太ももの内側にペニスを押し付けるようにし、手の中でループを出して握って温め、ペニスにゆっくり塗布する。その間に上半身のリップサービスなどを行いペニスへの意識を散らしておく。指をピースして、ペニスの側面を挟むように握り、手のひらをおおいかぶせて上下にしごきながら、ゆっくりスパイラルしてエロティックに見せつつ、気持ちは早くイケ！と思いつつ行う。」

「セクシー！セクシー！and クイックリー！クイックリー！」と言ったら、みんな何度もうなずいていました。

安全に働くために必要なことは、お客さんを満足させながら自分の身体を守りつつサービスしていくことほどの国でも共通認識だし、そのための情報収集や予防ケアをするために現場の人に会いに行く現場介入は本当に必要なことだと確信を持っているアウトリーチでした。

セックスワーカーのために働きかけてくれる人

スカーレットアライアンスのエレナさんのご厚意で、車で海岸をドライブしながら、1970 年代にセックスワークの非犯罪化に尽力してくれた人類学者でトランス女性のロバートさんに会いに行きました。

1970 年代にセックスワーク運動を始められた方で、キッカケはセックスワーカーが警察からお金を巻き上げられていることを耳にし、仲間のトランスジェンダーセックスワーカーも理不尽な嫌がらせなどを経験していることを知り、セックスワーカーや警察、客からの聞きとり調査を行うようになったそうです。特にストリートベーストという道で売春をする人に対して警察が毎日 100 豪\$ を徴収して、彼女達が不服に思っても費用が用意できずに裁判を起こせず泣き寝入りする、ということが起こっていました。それを知ったロバートさんは非常に遺憾に感じ、そんな状況を良くしたい、と思いセックスワークに関する本を書いたそうです。その本を読んだ市議会議員の一人が彼女に間接的な働きかけをし、ロバートさんの活動に政府から 500 万円の予算がついたそ



うです。それを元にセックスワーカーの運動をより拡大しセックスワークを厳罰化する法律のみを排除しセックスワークの非犯罪化を構築していきました。

また、ロバートさんはトランスジェンダーに対するサポートや理解を広げるためにも、「ジェンダーセンター」を立ち上げたくさんの人々にジェンダーに関する学びやサポートを提供する場所を作られました。今回はジェンダーセンターへの見学には行けませんでした。日本でセクシャルマイノリティーや LGBTIQ の人にとって必要なことを学ぶ場所としてシドニーへの留学を心からおススメしたいと思いました。

また、ウーマンリブが盛んになったころからオーストラリアでは女性の社会進出や就学意識の向上から、たくさん女性の女性が活躍している社会環境があることも背景に考えると、セックスワーカーの権利向上のために働きかけをしてくれたロバートさんは偉大な先駆者として語り継がれていかなければならない人であると思いました。

終わりに

メルボルン、シドニーを視察して非常に貴重な学びを得ました。そして、誰でも安心安全に仕事をしたい。と思うのは当然で誰にでも与えられた尊厳だと思います。そして、セックスワークに対する差別や偏見を無くし、今を生きるため、未来を築くために必要な情報提供やサポート、関係機関との連携や定期的な会合、現場での情報収集など日本の性産業における必要なサポートの在り方について本当に多くの学びを得ました。早速日本に帰ってからいろんな方々と面談やワークショップ等を行っています！

日本のセックスワーカーを始め、全ての人の性と人生の健康と安全について働きかけをしていきたい、と強く思い、これからも私自身の社会還元ができるように働きかけをしていきたいと思ひます。

【水嶋かおりん プロフィール】

独立系風俗嬢兼風俗嬢講師・メイククラブアドバイザー。2012年よりSWASH参加。2013年独立開業。山梨県出身、東京都在住、1983年生まれ。10代よりセックスワークを始め、多種多様な性風俗に従事、23歳から風俗嬢講師を始めメイククラブアドバイザーとして社会活動にも参加。全国の風俗店や色街散策を趣味とし日本の性風俗産

業の安心と安全について考え、日本のセクシュアルヘルスについても活動する性戯の味方。

【SWASHの活動に参加したきっかけ】

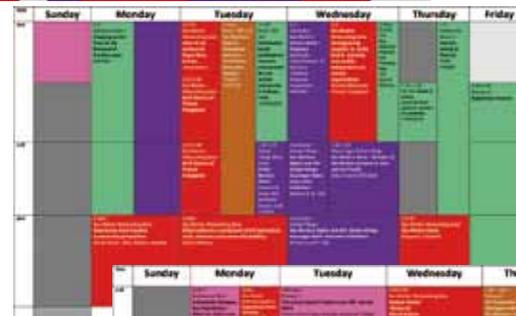
かねてから SWASH メンバーとの面識を持っていましたが、自分自身ができることがなければ足手まといになると思い個人での活動をベースにしていました。2011年に釜山で行われた国際エイズ会議に数日だけ一緒にさせて頂き、活動をしている人とのつながりによって得るものの大きさを感じて 2012 年から参加させていただきました。

自分が問題とと思っていることでは日本の性産業への入口のハードルが近年下がってきていると感じますが、性感染症予防に関する情報提供や安心安全に働くための環境構築やガイドラインが提供されていません。教育現場における性の知識提供がタブーとされている日本では満足な性教育が行われていないのでワーカーさんの中には「ピルで性感染症が予防できる。」と間違った知識を持って働いている人もいたりします。性産業全体の中でなにか困った時に相談に乗ってくれる人や実際にサポートしてくれる専門機関の存在がないので性産業を差別しない支援者や専門家の育成が大事だと考えています。

そして今後やって行きたいことで個人的に考えていることが、夜 23 時くらいまで営業しているセクシュアルヘルスセンターのようなものを作ることが目標です。ここでは検査、コンドームの配布、ピルの提供を無料あるいは低額で行い、一次予防の意識向上を図り性に関すること以外にも心と体の健康に関する相談業務や社会福祉支援の窓口のような機能を果たす場を作ること。「セックスワーカーが生きやすい社会はみんなが生きやすい社会」だと思うので、性風俗に生きる人々の幸せ作りが社会全体の幸福につながるように有益なものを輩出すること。言葉の通じない人や偏見を持った人、無関心層に対して問題意識の共有やどのような働きかけをすることで実現可能な状況になれるのか？ということが具体的に理解でき、そのために動ける人、活動支援ができる人、資金調達に関する知恵を与えてくれる人、医療・福祉・企業・ビジネスパーソン、法律の専門家、政治家など大きな連携が必要となります。

今回エイズ会議で得たことは、セックスワーカーの問題は社会の問題と密接に関係しているということ。日本では性を扱うこと自体に抵抗があるのでセックスワーカーという職業への理解を広げ差別を無くしその壁を乗り越える取り組みをすすめていくことが必要なことだと思ひました。

今、現在私が取り組んでいることとしてコミュニティーの場作りをし、仕事のスキル、ビジネススキル、IT、法律、医療、語学、社会福祉等を学んだりコミュニティーとしての居場所作りをすすめているのでより多くの人との連携を図っていきたくと思ひます。



エイズ会議におけるセックスワーカープログラム

- 赤: SW ネットワーキングゾーンで行われたセッション
- 紫: グローバルレレッジでの SW アクティビティ
- ピンク: メインカンファレンスで SW スピーカーが発言するもの
- 黄: SW アライによるプレゼンテーション
- 緑: SW に関連するほかのトピックやアクティビティ
- ブラウン: SW について問題のあるプレゼンテーション

「WHOのエイズ対策のガイドラインに、初めてトランスピープルが入った！」

大河りりい

日本のエイズ対策も、これ以上トランスジェンダーを無視してはいけない。

「SWASH」メンバーであり、トランスピープル（出生時に付与された性別を越境する人々）を対象としたセクシュアルヘルス増進のために活動している自助グループ「TGWAP」のメンバーでもある、りりいと言います。この度、公益財団法人エイズ予防財団の助成を得て、2014年7月20日から25日にかけてメルボルン（オーストラリア）で開催された「第20回国際エイズ会議」、およびその前々日と前日に開催された、セックスワーカー・グループ主催のプレカンファレンスに参加させて頂きました。

本会議における私の主な目的は、トランス女性（出生時に付与された男性としての性別を越境する女性）、およびセックスワーカー女性のエイズ対策をめぐる日本の現状と課題について発表するとともに、海外の自助グループが持つトランスピープルやセックスワーカー支援のための知見を学ぶことでした。



日本のエイズ対策事業において不可視化されているトランスジェンダー・セックスワーカーの現状について発表する筆者

1. セックスワーカー・プレカンファレンス

国際エイズ会議に先立ち開催され、30ヶ国以上、300人以上のセックスワーカーたちが参加したセックスワーカー・プレカンファレンス。日本でよくあるセックスワークをめぐるイメージって、セックスワークは望ましくないことであり、それをしている人は愚かかわいそうで、きっと何か不幸な過去を持つ女性（トランスや男性のセックスワーカーもいるんだけど…）で、そこから救い出してあげることが望ましい…みたいな（^^）、当事者をないがしろにした、上から目線の「助けてやってる、支援してやってる」という感じで充滿されているような気がするのですが、このプレカンファレンスはそんなイ

メージとは全く違うものでした。多様なセックスワーカーたちが自ら声を上げ、自分たちのリアリティを伝え、安全かつ健康に過ごし、働いてお金を稼ぎ、人としての当たり前の権利を獲得するためにはどうすればいいかを、ものすごいエネルギーで考え、意見を出し合い、まとめあげていました。私も夢中になって、日本の状況とか、アイデアを出して、気が付けば一瞬で2日間が終わったという感じ。これがアクティビズムか！と目が覚めるような、刺激的な時間でした。

「セックスワーカーの声が重要、セックスワーカーなしにセックスワーカーのことを決めるな」、「エイズ対策はセックスワーカーの協力無しには出来ない」、「セックスワーカーは自分たちの人生の専門家だ」、「セックスワークの非犯罪化をサポートし、HIVを持っているセックスワーカーをサポートする」、「セックスワークは仕事。移住労働者のセックスワーカーは、他のセックスワーカーと同様に選択して働いている。犠牲者や人身売買被害者ではない」、「セックスワーカーは紙の上の言葉ではなくお金を求めている」…。これらは、プレカンファレンスで出された声の一部です。当事者たちが活動のイニシアティブを持たない、上から目線の救済活動からは絶対に出てこないような、セックスワーカーたちの怒りとか情熱とか優しさとか…、いろんな気持ちやエネルギーに満ち溢れた言葉が次から次へと飛び出してくる、そんな感じでした。

2. トランスピープルに対するエイズ対策

今回の会議で最も話題になったトピックのひとつが、WHO（世界保健機関）による新たなガイドラインの発表についてでした。とりわけトランスピープルに関しては、初めてWHOのガイドラインにキーポピュレーション（HIVのリスクに直面しやすい人々であり、エイズ対策の鍵となる人口層）として含まれたことが注目されていました。

会議では、これまでトランス女性をMSM（男性とセックスする男性）の下位分類として位置づけてきたことで、トランス女性を対象としたエイズ対策を行っていないMSMのグループにトランス女性支援のための予算が流れたり、トランス男性が直面している困難がないがしろにされるなどの問題が生じていると指摘されていました。そのため、今回WHOのガイドラインにおいてトランスピープルがMSMから独立したことは、トランスピープルに対するエイズ対策において画期的かつ重要な第一

歩であったと言えます。

国際的にトランスピープルに対するエイズ対策がますます注目されている一方で、日本ではエイズ予防指針に個別施策層としてトランスジェンダーの人々が含まれておらず、HIV/AIDSをめぐるリスクへの脆弱性が指摘されているものの当該集団に対する十分な実態調査すら実施されていません。今後、日本においてもトランスピープルを対象としたエイズ対策が強く求められています。



WHOのガイドライン (2014)

3. PrEPの導入推奨へのリアクション

今回の会議では、WHOがMSMへのPrEP（HIVにさらされる前に抗HIV薬を飲むことでHIV感染を防ぐ予防方法）の導入を推奨したことも注目されていました。対象がMSMに限定された背景としては、MSM以外のキーポピュレーションのコミュニティがPrEP導入に意欲的では無かったからだということでした。しかし、たとえば欧米圏以外のMSMのコミュニティのメンバーから、治療のために抗HIV薬を入手出来ない女性や子どもがたくさんいる現状で次の段階（PrEP導入）に行こうとするのは倫理的におかしいのではないかとといった指摘が慎重かつ厳しい意見が出されていました。

また、セックスワーカーのコミュニティのメンバーからは、コンドームよりもはるかに高価な抗HIV薬を入手出来る人は限られてしまうし、たとえ入手出来たとしてもコンドーム同様セックスワークをしている証拠として不当な逮捕につながってしまう恐れがあるなどの意見が出されていました。そして、結果としてPrEP導入はセックスワーカーの健康増進にはつながらない、それよりもまずはセックスワーカーの健康や安全を阻害しているセックスワークの非犯罪化が重要であると指摘されていました。

4. トランスジェンダーが直面している困難

会議では、トランスジェンダーはその外見からすでにからかいや暴力の対象とされたり、差別や偏見によって



「スティグマと差別」に関する記者会見の終了直後、世界各国の仲間とトランスジェンダーの直面する問題を訴える筆者（写真右端）

教育や就業の機会から排除されがちであり、それゆえエイズ対策以前に差別や偏見の問題解決が優先されるといった指摘がありました。同様に、教育や就業の機会からの排除に依拠した低学歴や貧困の問題は当事者の孤立化を招いてしまい、そのことが自助グループの立ち上げや当事者同士の紐帯を困難にし、ヘルスサービスへのアクセスをいっそう阻害してしまうという指摘もありました。

さいごに

今回の会議への参加にあたり、まずはいつもお世話になっているMASH大阪のメンバー、発表に関して多くのアドバイスを頂いた名古屋市立大学の市川研究班のみなさんに感謝致します。次に、会議期間中多くの時間を共に過ごし様々な場面でサポートしてくれたSWASHのメンバー、海外のトランスジェンダーのシスターたちと出会うきっかけを作ってくれた恩人であり、今回も大変お世話になった大阪府立大学の東さんにも感謝致します。そして、何より今回国際エイズ会議参加という貴重な機会を与えて頂いた公益財団法人エイズ予防財団に感謝致します。

さいごに、会議前々日の2014年7月18日、マレーシア航空機の墜落事故により会議参加予定者を含め多くの尊い命が奪われるという不幸なニュースが入りました。犠牲になられた方々のご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

【大河りりい プロフィール】

2009年頃からSWASHの活動に参加。主な関心はエイズ対策やトランスジェンダーが直面している様々な問題解決を目指すこと。

2014年2月に開催されたWPATH（トランスジェンダーの健康に関する世界専門家協会）のシンポジウムや、同7月に開催された国際エイズ会議にてトランスジェンダー・セックスワーカーについて発表を行う。

「世界の視点から客体化して見るセックスワーク」

濱中洋平



■セックスワーカーのための業務上の健康と安全の基準・Elena Adriana Jeffreys のスピーチから学ぶ

7月にオーストラリア・メルボルンで行われた第20回国際エイズ会議(AIDS2014)の壇上で、Elenaはセックスワーカーの労働環境と権利について、今後のセックスワーカーの置かれる環境について、非常に有益かつ実用的なストラテジーを提唱した。

Elenaは主に非犯罪化について強調したが、日本においても性産業に携わる全ての労働者にとって、セックスワークの非犯罪化が一番大事かつ優先すべき事柄であり、非犯罪化される事がセックスワーカーやその経営者にとって最も安全だという事は明白である。しかし現状では、一部合法ではあるものの、大半が非合法や法の網の目をくぐっているような業態が圧倒的に多い。そういった状況下でセックスワーカーの労働安全を守る為に経営者とセックスワーカーの協力関係の構築が必要であり、¹ピア・エデュケーション²を通して安全に働くためのマニュアルを制作し、店舗ごとに個別に用意する必要がある。セックスワーカーのすべき事柄と経営者のすべき事柄の領域は分けて考える必要があるが、そこには一部重なり合う領域がある。その領域をどう定めるか、誰がどのように分担・負担していくかを定める事が必要である。

セックスワークを繰り返す事で起こりうる精神的ストレスや怪我、疾病のケア、アクシデント等から自分を守るための設備や道具の管理、セックスワーカー本人や店舗のセキュリティと安全の確保、清潔の維持や備品のリネンを誰が洗濯し準備するのか、適切な室温管理や苦情対応、飲酒や喫煙、ドラッグの使用を交渉されたとき誰がどう対処するか、食事を提供する場合は誰が用意するか、など細分化され多岐にわたる事柄の分担をしっかりと決めて行く事で、非犯罪化でない業態においても一定水準以上のセックスワーカーの安全は守る事ができるとElenaは言った。

また同時に³セックスワーカーたちが主導的に行動を起こし、主張し交渉することが大切だ、とも訴えた。⁴

窒息の可能性ゆえに枕を使ってはいけないという店舗が決めたルールに対して、それでは頭部の負担が大きいとセックスワーカーが枕を使う事を認めさせた、という事案があるように、労働安全を本気で守りたいのであれば、セックスワーカーが自らが行動を起こすべきであり、自発的な行動がセックスワーカーの権利獲得につながるとし、他者から言われて行動しただけでは何も変える事はできないと強調した。

■世界と我が国のセックスワークの違い

各国のセックスワークについての取り組みや状況を紹介する。

ニュージーランドでは、労働省がスカーレットアライアンスの作ったガイドラインをセックスワーカーの為に運用している。

セックスワーカーがいつセクシュアルヘルスのチェックをするかはセックスワーカー自身が決める事であり、管理する側が一方的に決める事は出来ないと定めているため、HIVおよびSTIの検査の義務は無い。定期的ではなく何か問題を感じたら検査を行う形式が殆どである。セックスワーカーはコミュニティ内で⁵ブラックリスト⁶を共有し、前もって性購買者(顧客)の情報を得るシステムが存在する側面もあり、煩雑なルールからある意味で解放されているのが現状である。

また、団結権と交渉の権利に基づいて⁷強制労働の反対、や⁸差別の反対、を唱えるセックスワーカーや団体も存在し、皆が同じ支払いを受けるべきであるという主張が強い。セックスワークは精神的、肉体的に悪い影響の強い仕事であるという印象や労働安全を守れないという外的な印象が非常に強く、さらに正当な支払いが受けられないという偏見が未だに存在している。

タイではセックスワーカーの労働安全の為にWISEという団体が密接に関わっており、ベトナムでアドボカシーのトレーニングをした経緯もある。セックスワーカーの労働安全のアドボカシートレーニングの研究として、労働省・セックスワーカーコミュニティ・労働活動家、それぞれのグループが同じフィールドでセックスワーカーの環境およびコミュニティの為に必要な事柄や対策について話し合う取り組みがある。

カンボジアでは未だに暴力、性暴力、飲酒およびドラッグの強要が蔓延しており、労働条件のポリシーを作る必要があるが様々な問題が障壁となっている。HIVに感染したら、労働的な保障がもらえるかという課題や妊娠をしたセックスワーカーは誰に助けを求められるのかなど多くの問題が置き去りにされて来ている。

パプアニューギニアではセックスワークは違法であるが、セックスワーカーへの嫌がらせ、差別は違法とされ

ている。しかし拉致をされセックスワークに従事される様な事が多く、犯罪化されている為に警察に助けを求めたり、裁判を起こし係争する事が難しいのが現状である。また、セックスワーカーに適した保険会社がなく、イギリスなど他国の保険に加入しなければならない。違法店舗で働いているセックスワーカー達は経営者には相談できず、意見をすることで⁹文句が多い¹⁰と解雇されることもある。

これに対して、日本での取り組みはほぼ無い。幾つかの任意団体が存在し、アドボカシーを行っている現状はあるが、現状では政府が協力的に介入したり協働をするという取り組みは見られておらず、現在行われているSWASHなどの任意団体による地道な現場への介入やアウトリーチが、今後のセックスワーカーの労働環境や安全と権利の確保及び社会的外的スティグマの緩和を促して行く一歩となるのではと考える。

■セックスワーカーの多様性

ひとまとめにセックスワーカーと括ると、そこにいるはずの少数者の存在を忘れがちである。セックスワーカーの中にはセクシュアル・マイノリティであったり、トランスジェンダーがセックスワーカーとして存在する。彼らは様々な困難を抱え、複合的なトラブルを背負っている事が多い。日本においてもそれは同様である。そして、その多様性の数だけセックスワークが存在しているのである。私のアウトリーチのターゲットである、MSM(男性間性交渉者)セックスワーカーの中にはHIVの感染リスクが他のセックスワーカーに比べ大きいという懸念や、問題が起きても中々相談が出来ないというスティグマの問題もあり、顕在化しない事が大半である。また、MSMコミュニティからも排除や差別、無理解に曝され、居場所を失う当事者が非常に多い。

今回のエイズ会議では、各国のMSMセックスワーカー出合い、新たな連携組織が発足した。International Network of Male Sex Worker(以後INMSW)は、世界の各国でセックスワークを行うMSMのセックスワーカーの情報交換や、意識共有やアドボカシーを今後進めて行く準備段階に入っている。

この国際会議を通じてセックスワーカーへの支援と言うものは、本人が持ちうる属性に対して幅広い視野で生育歴・性的属性・人格を受け止めた上で真の受け皿になるようなもの…つまり同調できる者による、同じ高さの視点 -- ピア -- で無ければならないと、確信を持つ事ができた。

【濱中洋平 プロフィール】

セクシュアルマイノリティ相談・同行支援及び性暴力問題やHIV/AIDSの予防啓発を中心に活動をしている。現在は主にMSMセックスワーカーにおける困難などについての調査や支援者向けの講演等を行っている。

セックスワーカー プレカンファレンスのアジェンダ



仕事柄、国内外の学会・会議に出席する機会が多い私は、国際エイズ会議の雰囲気がよく「好き」である。どの学会・会議に行ってもほとんど観光らしきことはせず、会議会場やミーティング場所と宿泊施設の往復を繰り返すだけなのだが、エンパワされるというのは正にこういうことを言うのだと実感できるからである。最近「パワー・スポット」なる場所を訪れる人たちの話を聞くと、その感覚に近いのかもしれない。



会場となったメルボルン国際会議場入り口

国際会議の楽しみ方

まず、国際会議で飛び交う言語(言葉)の違いが心地よい。日本語ではなく英語・スペイン語が飛び交うという様が心地よいというのではなく、同じ話題で話をしている人たちが使用するキーワードや用語が違うのである。

例えば、WHO が 2014 年 7 月に新しく発表した『キー・ポピュレーションの HIV 予防、診断、治療、ケアに向けた統合ガイドライン』では、キー・ポピュレーション (Key Populations) として新たにトランスジェンダー (Transgender People) が加えられた。英語に「ピープル (人々)」がついていることには重要な意味があるということ意識しつつ、本稿では「トランスジェンダー」と表記する。

このトランスジェンダーという用語を日本国内で見聞きしたことがないという人は多い。同じ対象について話をするのに日本では「性同一性障害者」や MtF (Male-to-Female) や FtM (Female-to-Male) といった言葉が使用される。国内外で日英の「なんちゃって通訳」をすることが多い私が、精神疾患概念である「性同一性障害 (GID)」という英単語を口にするのは、日本語を英訳する時ぐらいいである。MtF (Male-to-Female) や FtM (Female-to-Male) という、日本ではむしろ最先端の専門用語と誤解されているかもしれない用語もまた、国際会議の場では「過去の遺物」である。日本で LGBT の権利擁護に関わる人々やトランス当事者でさえ積極的に GID を使用し続けているというのは、国際社会においてはかなり特異な状況なのである【※1】。

特定の用語の定着と進化には日本の国内事情 (1990 年代半ば以降の医療体制や特例法の登場と展開) が深く関わっている。そのことを十分に理解した上で、それでも日本 (の

特異な状況) からしばし離れることができるというのは、個人的にはリフレッシュで、心地よい。言語 (言葉) の変化は、態度やアプローチの変化の反映でもある。論文やインターネットで、こうしたトレンドを把握することも不可能ではない。しかし、論文に新しい潮流が反映されるにはタイムラグが長すぎる。最新の動向を肌感覚で把握できるという意味でも、国際会議は最高の舞台を提供してくれる。

【※1】トランスジェンダーの円卓会議で、その存在が犯罪化されているイスラム圏のアクティビストが「ごめん下さい。私達の国では GID という概念をまだ使っています。イスラム教の指導者や政府と対話するには、医学的疾患概念が有効だから」と発言した。「ごめん下さい」と言った背景には、国際的に展開されている「脱精神病理化運動」がある。国際的診断基準である DSM-5 から GID は消え、GD に名称変更された。2017 年に発表される予定の WHO 国際疾病分類 (ICD-11) では GID も GD も使用されない可能性もあるという。日本で使用する言語を変えるタイミングは「いま」なのである。



WHO『キー・ポピュレーションの HIV 予防、診断、治療、ケアに向けた統合ガイドライン』に関するシンポジウムで紹介されたトランスジェンダーの定義

トランスジェンダーと HIV/AIDS

キー・ポピュレーションというのは、HIV/AIDS の惨禍の影響を最も受けている人々であり、なおかつ今後の HIV/AIDS 予防対策の動向において変化ををもたらす上で鍵となる人々のことを意味する概念である。Key Affected Populations (KAPs) とも表記される。前述のように、これまでの「男性とセックスする男性 (MSM)・「薬物使用者 (IDUs)・「セックスワーカー (SWs)」に、このたび新たにトランスジェンダーが KAPs に加えられた。より正確にいうと、HIV のサーベイランスで注目されるのは、トランスジェンダーの中でもとくに男性とセックスをするトランス女性たち (Trans Women) である。貧困や就職差別を理由にセックスワークに従事する人々が多い。その労働環境はとくに劣悪だとも指摘され、有名な学術雑誌 Lancet で報告されたところでは、「トランス女性の HIV 感染率は一般の 49 倍」(Baral et al., 2012) という恐ろしい数値もある。彼女たちはしかし、出生時の解剖学的特徴により、これまで MSM=Men who have Sex with Men というカテゴリーに分

類されてきた。

左下の写真に注目して欲しい。これは、トランスジェンダーのアクティビストたちによるデモ行進直前の記念写真である。彼らが掲げるプラカードには、「No more MSM/TG, but Transgender」(もう MSM と一緒にしないで)「We are left behind」(私たちを置き去りにするな)「No more Lip Service」(リップサービスはもういらぬ)「We need separate funding」(私たちに特化・独立した助成金を!)といった主張が書かれている。トランスはエイズ予防対策事業においてまだまだ不可視化された存在であり、事業費・助成金の類は、LGBT 支援や MSM コミュニティ支援という一括された形で流れ、トランスの当事者団体に独立した形では配分されてこなかった。LGBT コミュニティが連帯することの意義は言うまでもないが、T がほとんど「お飾り」のように、あるいはアリバイ作りの付け加えられている現状に対する不満は強い。そのことがトランスに特化、独立した予算配分をせよ。お金をもらった団体や組織は使途を明確にせよ、といった訴えにつながっているのである。



トランスジェンダーのアクティビストたちが掲げるプラカードの「数々」。「No more MSM/TG, but Transgender」(もう MSM と一緒にしないで)「We are left behind」(私たちを置き去りにするな)「No more Lip Service」(リップサービスはもういらぬ)「We need separate funding」(私たちに特化・独立した助成金を!)といった主張が書かれている。

ノー・モア・リップサービス

KAPs にトランスジェンダーが明記された意義は大きい。メルボルン会議では、これまでになくトランスジェンダーの存在が可視化されていた。KAPs と認識されて久しいセックスワーカーの存在感は、これをはるかに上回る。KAPs と認識されたということは、活動・事業展開への資金援助を含む、具体的な方策がこれについて来ることを意味する。「No more Lip Service」(リップサービスはもういらぬ) というのは、その期待を込めたダメ押しである。

こういうことが、「世界の常識、日本の非常識」だと感じる場面でもある。つまり、たとえば KAPs であるセックスワーカーの健康問題やその背後にある労働環境について、程度の差こそあれ、各国政府あるいは国際機関が何もしないということは考えられない。「100% コンドーム使用政策」など、政府主導の積極的な介入が人権侵害を引き起こしてきた過去の反省もあるわけで、何でもすればよいということではない。日本に目を転じれば、セックスワーカーを「個別施策層」に挙げ、「感染の可能性が疫学的に懸念されながらも、感染に関する正しい知識の入手が困難であったり、偏見や差別が存在している社会的背景等から、適切な保健医療サービスを受けていないと考えられるために施策の実施において特別な配慮を必要とする人々」(エイズ予防指針, 1999) と明記しながらも、実際には具体的な方策が何も講

じられていないという「不思議」が、「非常識」が、15 年もの長きにわたって続いているのである。

「特別な配慮」や「追加的措置」が何も行われてこなかった理由 (言い訳) として、これまでに何度か聞いたことがあるのは、コミュニティが不在で接近困難であるがゆえにニーズや実態が把握できていない、といった説明も含まれる。これについて少し前の話になるが、2011 年に釜山で開催された第 10 回アジア太平洋地域エイズ国際会議での経験に触れておきたい。この時私はセックスワーカーについて「接近困難層 (hard-to-reach population)」という用語を使って口頭発表をおこなったのだが、「私たち (セックスワーカー) にとってセックスワーカーは接近困難層ではない。接近困難である原因は私たちにあるのではない。あなた自身にあるのだということをお考えいただくことがあるか」という批判を受けた。そして、赤面した。こうした批判が、当時の私にとってそうだったように、エイズ対策事業に関わる関係者の、とくに計画や立案に影響をもつ人々の意識に響くことを願う。ノー・モア・リップサービス! は、日本のエイズ予防対策に責任を負うすべての人々に向けられている。

ハーム・リダクション

通訳を兼ねていた私が参加したのは主にトランスジェンダー関連のセッションだが、ここでは少し「ハーム・リダクション」についても触れておきたい。1980 年代半ばから注目されるようになった「注射器 (針・シリンジ) 交換プログラム」は、今日の HIV 予防対策におけるハーム・リダクションの「代名詞」ともいえるもので、その主な目的は使用済の注射器を新しいものに交換することによって「回し打ち」による血液感染を防止することにある。ハーム・リダクションの字義は「危害」(harm) を「減らすこと」(reduction) であるが、薬物使用そのものを「危害」と見なしているわけではない。薬物使用の場合における「危害」とは、保健・公衆衛生学的には HIV や B 型 / C 型肝炎など血液由来の感染症、過剰摂取 (overdose) による病的状態や死亡率、中毒症及び依存症などの身体的・精神的疾患などを指す。さらに、失業、逮捕、(家族を含む) 人間関係の悪化、医療費の増大、社会不安 (HIV 感染症の拡大・薬物に絡む犯罪など) などを、社会・経済的な「危害」と捉え、これを軽減することを目的とするのである。

日本でも、改訂版・エイズ予防指針には「個別施策層」として薬物使用者が新たに加わったところだが、ハーム・リダクションを導入する動きはいまのところない。しかし、ハーム・リダクションがもたらす利益は、ミクロ・レベル (個人・家族など) に留まらず、メゾ・レベル (地域社会)、マクロ・レベル (社会) に及ぶため、公衆衛生に有効な実用主義的アプローチとして、当事者コミュニティや NGO のみならず、政府当局者や WHO (世界保健機関) や UNAIDS (国連エイ

ズ合同計画)などの国際機関にも広く認知されている。少なくとも、今回のメルボルン会議でも繰り返されていた「薬物使用者に対する犯罪化と処罰を治療とヘルスケアに置き換えよ」というスローガンが生まれた背景や、これを正当化するエビデンスについて、私たちはもっと知る必要がある。

キーワードとしての非犯罪化・予防・人権

エイズ対策の歴史は、いくつもの重大な失敗の繰り返しの歴史でもある。エイズ四半世紀における最大の反省の一つは、保健医療アプローチに「人権」という視点が欠けてきたことである。KAPs (MSM、受刑者、薬物使用者、セックスワーカー、トランスジェンダー) が共通して直面している問題は、「スティグマと差別」である。そして、彼らの存在や行動あるいは職業を犯罪化する法律は、当事者のリアリティに対して不寛容な社会的態度を正当化し、助長する。また、エイズ対策の計画・立案に当事者の参画が必須とされる時代において、犯罪化の対象になっている職業に携わる人々、あるいはその存在や行動が非合法化された状況にある人々が、自分たちのリアリティを語り、各国政府や関係諸機関と信頼に基づく協働関係を築いていくことはいかにも困難である。だからこそ、「非犯罪化・予防・人権」は、これからのエイズ対策におけるキーワードなのである。

日本の個別施策層である「性風俗に関わる人々」についても、売防法が厚い障壁となって、「特別な配慮」や「追加的措置」が何も進んでこなかった。国内には、何ができないか、どうしてできないのかを説明する人々はたくさんいても、何ができるかを一緒に考えてくれる人たちが行政や政治、あるいは研究の世界に少なすぎる。このように、国際会議では日本の現状と諸外国の違い、国際社会のスタンダード(基準)とのズレを見せつけられて愕然とする場面が多いのだが、ズレや違いを知るといっても悪いことばかりではない。それが確認できたということは、「暗いトンネルの先にある光」が見えたということだと思えばよい。会議で出会う人々というのは「いつか来た道」を語ってくれる先輩たちであり、この先に続く道のたどり方を一緒に考えてくれる仲間である。だから私は国際会議が好きなのである。

さいごに

厚生労働省エイズ対策事業・研究班「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」(2006~2008年度)をきっかけに SWASH とつながり、その後も「個別施策層(とくに性風俗に係る人々・移住労働者)の HIV 感染予防対策とその介入効果に関する研究」(2009~2011年度)で調査研究を共にしてきた。今回のメルボルンを含め、これまでも何度か国際会議や全米セックスワーカー会議などを一緒にしているのだが、



「スティグマと差別」に関する記者会見の様子。登壇したのはキー・ボビュレーションを代表する面々で、反同性愛法が成立したばかりのナイジェリアで法案成立の前と後でそのインパクトを調査した研究者、ナイジェリアの権利擁護団体代表、薬物使用者の支援団体代表、セックスワーカー当事者団体の代表、トランス当事者ネットワークの代表、ヒューマンライツ・ウォッチ代表など。

SWASH 専属通訳者の特権で「当事者限定」の場に入らせていただき、研究者という立場や通常のインタビューでは引き出せないような、「当事者同士」の会話を聞かせていただく機会に恵まれてきた。もちろん、そこで私が見聞きしたことはアウトプットの対象ではない「その場を出ない」ものなのだが、私の中にはこれからもずっと残っていく貴重な経験である。

ただし、こうした貴重な経験には「居心地の悪さ」も含まれる。当事者主権の実践やピア・サポートのありようについて、組織・団体によっては、通訳者を含めてすべてを「当事者」に限定することが重視される。今回も、私の立場性が問われる場面が何度かあり、「セックスワーカーとの」に限らず、非当事者や研究者という立場で関わる上での課題、自助支援や当事者運動と支援者のよりよい関係性の構築について考えてゆくうえで、重要なヒントと宿題をいただいたと思っている。

最後の最後に、一言。いつもながらメルボルンでの SWASH の活動量は凄かった。遅くまで発表の準備をしたり、打ち合わせ会議をしたりと、寝不足の身体に鞭打つように SWASH は働き続けた。その肉体的・精神的疲労が相当なものだったことを間近で見ていた私は知っている。帰国してなお、こうして報告書をまとめ、社会に情報発信していく努力を惜しまない姿に、改めて圧倒される思いである。SWASH の活動は、当然のように無償ボランティアで賄われているが、国が違えばこれは「当然」ではない。政府による活動助成が受けられる。日本が進進国でさえなければ、国際的な諸機関からの援助も受けられるチャンスがある。彼ら突き動かしているものが何であれ、そこに費やされるエネルギーや時間は無限ではない。Shared Responsibility (責任の共有) と No More Lip Service! を私自身も肝に銘じたい。

【東 優子 プロフィール】

「性の健康と権利」「性の発達と支援システム」をテーマに研究する性科学者。1991年からエイズのボランティア活動を始め、SWASH とのかかわりは厚生労働省エイズ対策事業研究班と一緒に調査研究を始めたのがきっかけ。大阪府立大学地域保健学域(教育福祉学類)で教員をしている。

「もぎたて国際会議。その日の内に書かれたこと。撮ったもの」

性器に余計な情緒を外して話せた時新しい何かがかかるかなあ。(必要な時ファンタジーを付け外しするのは個人の自由)他の体の部分と同じく細胞で出来てるので、もう愛だの母性だの力強いだのは一旦おいて話したい。性教育があんだけでかい問題になるのもたぶん余計な情緒が邪魔してる気が。

パキスタンのトランスジェンダーのドキュメンタリーをみて意識なんて間違ったら申し訳ないのだけど「私がこの道を行くだけで、家族たちを苦しめることになる。私はただシンプルに幸せな日々を望んでるだけ。私の幸せは好きな格好、メイク…」とため息まじりに言っているいろいろ詰まった。

コンドーム会社のブース



セックスワーカーのブースに貼られていた移民セックスワーカーのポスター

エイズ国際会議、セックスワーカープレカンファレンス。記念撮影。シャッター合図は「money(o^^o)!!」全員サイコーの笑顔になった瞬間…。さすがです。

怒りも喜びも惜しみなく差別なく表すことの良さを実感します。「怒りは何も生まない」てのは誤魔化しだということが清々しいほどにわかります。

机上の計算ではベストであっても現実にも動かしただけに必ず漏れと破れ目があるということを常に意識しておかないとどンドンイントレランスになっていくと思う。今回の会議は特にそのことを実感することが多かった。

演劇やパフォーマンスを使っの若い世代へのセクシュアルヘルスの予防啓発のセッションに来てます。中東のエビデンスが多い。感情と可能性への喚起、とか興味深い言葉が。

女性のドラッグユーザーの抱える困難さについてのセッションにも行きました。ドラッグを使うか否か、が問題の全てではないという認識を多くの人が持てるという。ドラッグのことだけじゃない話。正論(に見えるもの)には気をつけないと。



セッションの様子

げいまきまき



セックスワーカーのブースの天井に飾られたシンボルの赤い傘

合法化以前にまず非犯罪化ということ。あるものを隠そうとすればするほど問題は地下に潜り迷走を始める。セックスワーカーはいつだってどこにだっている。そしてどの仕事であろうがセックスワークと絶対的に違うといえるのか。選択の自由、自己責任?それはどの時点での話なのか。罰とは何が目的なのか。

タイのセックスワーカー支援団体エンパワーの素晴らしさの一つには戦略力。英語が第一言語でないのに英語圏ではパフォーマンス力を活かす。対外的に訴えるために会場内の誰もが通る道で行うなど。



エイズ国際会議 2014 のガイドブックの裏表紙

エイズ国際会議。近代的な会場で沢山の人が世界中から国連も研究者もビジネスも当事者も関わる。華やかさももある。でもこの華やかさ賑やかさの1枚下に日々のそれまでの沢山の悲惨や怒り、悲しみや困難、そして祈りが蓄積されているのだと思う。

【げいまきまき プロフィール】

2011年から国際エイズ会議や保健師へのワークショップに参加。パフォーマンスアーティストであることも活かし、性の心身の健康や生存権、ジェンダーと貧困の問題についての社会学者と共同制作での表現や執筆。ジェンダーにスポットがあたる生きづらさについてのトークイベントでのパネリスト経験もあり。自身の1人ユニット「カウパー団」主宰。

【個人的な話】

私がセックスワークが好きなのはどこでもいつでも可能性が作れるから。私の体私の特性。衣裳やメイクも必要。でもそれだって自分に合ったもので且つまだ見ぬ誰かの欲望、ニーズを探つてのこと。とてもクリエイティブで楽しいことでお金=生活の安心にもなる。sw is work

「セックスワーカーの人権国・ニュージーランドと豪、買春者処罰の先駆け・スウェーデンはこんなに違う」

要 友紀子

セックスワークをめぐる諸外国の最近の動きで国際的に有名なトピックは、カナダ・オンタリオ州の控訴裁判所で売春禁止法の無効判決（2012年3月）、欧州議会での買春者処罰化方針可決（2014年2月）、アムネステイ国際ナショナル「セックスワークの非犯罪化：ポリシーの背景を示す文書」の流出（2014年1月）、フランス上院議会での買春者処罰化法案否決（2014年7月）などがあります。エイズ会議でも、こうした世界の政治の影響についてたくさんの発表、議論がありました。

セックスワークに関するセッションでは、ピアエデュケーション、労働と安全、HIV予防とセクシュアルヘルス、非犯罪化と法律、移住労働、人身売買、偏見と差別、ガバナンストレーニング、医療と治療、MSM(Men who have Sex with Men)、トランスジェンダー、ILO（国際労働機関）・WHO（世界保健機関）・UNAIDS（国連合同エイズ計画）・UNFPA（国連人口基金）など、多岐に渡るテーマが設定されました。

ピアエデュケーションワークショップでは、各国のピアエデュケーターやアウトリーチワーカーが自国で当事者たちにレクチャーしている、安全な働き方、サービス提供の仕方についてのデモンストレーションが行われ、SWASHも発表を行いました。



SW について問題のある記事にダメ出しする活動をしているオーストラリアの SW 団体 Debbly

セックスワーカーにとって最も理想的な国・ニュージーランドのグッドプラクティス

労働と安全、非犯罪化についてのハイライトとしては、非犯罪化されているニュージーランドの団体 NZPC (New Zealand Prostitutes' Collective) が、非犯罪化による具体的な効果として、オーナーによるセクハラ被害について、セックスワーカーが約 200 万円の賠償金を勝ち取ったニュースを紹介しました。また、お金を払わない客がいた時、警察が客を ATM まで連れて行き、現金を引き出させ払わせるなど、セックスワーカーが一般の労働者同様の市民的扱いを受けている事例も紹介されました。その他、セックスワーカーと客に性感染症予防具の

使用を課す売買改善法（2003）や「ニュージーランドの性産業における職業上の健康と安全に関する手引書」（2004年労働省※1）の政策も労働の安全に非常に役立つものでした。一方、セックスワークが非犯罪化されていなくても、労働であることに違いなく、労災や被害については救済されるべきで、また可能であるケースについても話し合われました。



SW にセクハラをしたオーナーに対して賠償金を課すことを伝えるニュース

「スウェーデン・モデル」の弊害

買春者処罰法の先駆けであるスウェーデンで活動する Rose Alliance は、2013 年に発行した「ピアの観点からのセックスワークと HIV/STI 予防」(※2) という調査報告をし、「(99 年から続く) 買春者処罰法によって、差別と偏見は強化された」(82%) 等の当事者らの声を紹介、2013 年にセックスワーカーが法律や差別の犠牲となって殺された事件のビデオが上映されました (※3)。

このビデオは、シングルマザーのセックスワーカーだったジャスミンさん（スウェーデン）と、トランス女性のセックスワーカーのドラさん（トルコ）が殺された事件のドキュメンタリーで、アメリカの SW アクティビスト、キャロル・レイと、Rose Alliance の Pye Jakobsson (NSWP 代表) によって制作されました。

ジャスミンさんは、セックスワーカーであること、たったそれだけの理由で、社会福祉から不適切な母親と判断され、パートナーに親権をとられました。彼女は子育てには何ら問題がないと公的な評価を受けていたにも関わらずです。スウェーデンの買春者処罰法においては、セックスワーカーは救済されなければならない対象で、他の人より劣った人とされているため、それが社会福祉にも反映された形となりました。

彼女は子どもをパートナーから取り戻すために闘っていました。その過程で、彼女はパートナーに殺されました。彼女が「スウェーデン・モデル」といわれる法律の犠牲者と言われる所以です。ジャスミンさんは社会福祉と闘うために、シングルマザーのセックスワーカーのことで調べていたら Pye Jakobsson を知り、会うことができました。彼女にとって Pye Jakobsson は、セックスワークを差別されずに話せる初めの人でした。

客に殺されたドラさんのいたトルコは、世界でも二番

目にトランスジェンダーの人々への差別がひどいと言われています。この5年だけでも30人以上が殺されました。こうしたデータや事実はなかなか公に発表されることはありません。ドラさんが殺されたことに抗議する行動が行われました。



私たちは、ジャスミンさんとドラさんのことを忘れません

セクシュアルヘルスの先進地域、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州 SWOP の警察研修

性産業に従事する人々に対し、性的健康に関する情報と支援を提供するコミュニティ組織 SWOP では様々なエキスパートの人々にも研修を行っています。中でも、性産業を取り締まる警察への研修は、セックスワーカーにとってはとても頼りがいのある活動の一つに違いありません。

この研修の講師を担う SWOP のメンバーは、発展途上国での健康保健・教育に携わったり、人身売買政策の策定や、他国で警察と仕事を共にする経験があるなど、法執行機関にも精通しており、そういった点においても専門的であります。

警察へのトレーニングの目的は、性産業に関する実践的なスキルと知識を得てもらうことです。複雑で多様な性産業について知り、警察官自身が性産業に抱えている印象や見方について検証し、それが、実際にそこで働いている人たちと関わるときにどのような影響をもたらすかについても考えてもらうというワークショップが行われています。

例えば、セックスワーカーはどんな人かを知る。「ニューサウスウェールズ州には約 1 万人のセックスワーカーがいます。そのうち 10%は男性、5%はトランスジェンダー、85%は女性です。店舗で働いているセックスワーカーは、平均して週に 30 人の客を 3 回のシフトでとっています。セックスワーカーの 25%は婚姻しており、約 25%は外国出身者です。」ということから、働いている業態やサービス内容まで学びます。

ステレオタイプな見方や考え方は、サービスにアクセスしなくなるセックスワーカーを増やしてしまうので、共に現場の人々を守る協働をする上で問題があることも学びます。(以下はイラストの翻訳)

- あの娘の服はちょっと下品だな...
- あいつ、お硬い格好だね...
- あのトランス、こわい！
- あの銃、こわい！
- なんであんな仕事ができるのか、理解できないよ



SWOP の警察研修資料の一部

- なんであんな仕事ができるのか、理解できないね
- それでも私たち、一緒に仕事はできる
- 一緒に活動するためには、あらゆる個人的な思い込みを克服する必要があることをわかってもらうため、どんなステレオタイプが自分の中にあるかを考えてもらいます。そうすることで警察がやっている仕事と SWOP がやっている仕事を分けることはできないのだということを知ってもらえることができます。

エイズ会議ではそのほかにもいろんなセッションが持たれました。移住労働のセックスワーカーを取り巻く状況や政策について各国のモニタリング、タイからは来年の ASEAN 統合の視点から捉えた発表、差別とスティグマ測定するためのツール紹介、組織運営に関するトレーニングなどどれも有意義なものでばかりでした。会議以外にも、自主的に経験豊富なアクティビストにインタビューさせてもらい、1 人のプレーヤーとしても、よりチームワークにとっても、とても実りのあるオーストラリアとなりました。来年はバングラデシュでアジア太平洋地域エイズ会議があります。私たちが海外で参考にされるような活動ができるようにがんばります。

※1「風俗の安全化と活性化のための私案 セックスワーク・サミット 2013」(2014年2月21日) <http://synodos.jp/society/7158>
 ※2「EN ANNAN HORIZONT SEXARBETE OCH HIV/STI-PREVENTION UR ETT PEER-PERSPEKTIV」<http://www.rosealliance.se/wp-content/uploads/En-annan-horizont.pdf>
 ※3 ドキュメンタリービデオ「Jasmine and Dora 4-Ever」<http://vimeo.com/groups/sexworkactivist/videos/87450331>



スカーレットアライアンスメンバーは、SW の法律と差別の問題に触れない内容のポスター発表には、このステッカーを貼り歩いていた。

【要友紀子 プロフィール】

1999 年より SWASH メンバーとして、性風俗で働く人々の性感染症予防啓発活動や、現場での被害の相談支援に従事。主な著作に、『風俗嫌意識調査～ 126 人の職業意識～』(水島希との共著・ポット出版、2005 年)、『売らないワタシが決める』(共著・ポット出版、2000 年)、『性を再考する』(共著・青弓社、2003 年)、『「オネエ」がメディアにモテる理由』(藤井誠二編・春秋社、2013 年)など。最近のインタビュー記事・執筆に、「偏見をうまないセックスワーカー支援の可能性」(Web Ronza、2014 年 4 月 24 日)、「池袋出会いカフェ女子大生殺人事件 裁判傍聴記録」、『風俗の安全化と活性化のための私案 セックスワーク・サミット 2013』(SYNODOS)

最後に

毎年エイズ会議で会えたアンドリューが、今年はいませんでした。昨年2013年12月26日、アンドリューは亡くなりました。エイズ会議ではアンドリューのメモリアルセッションが持たれ、みんなでアンドリューゆかりの地を訪ねました。

アンドリュー・ハンター（Andrew Hunter）は、1968年オーストラリアで生まれ、1988年頃からセックスワーカーや HIV とともに生きる人々、ドラッグユーザー、トランスジェンダー、ゲイの人々とともに活動を続けてきました。彼は、オーストラリアのセックスワーカー運動の先駆者であり、同国で有名なセックスワーカー団体のネットワーク組織、スカーレットアライアンスの創設メンバーでした。

1980年代（前半）の国際状況といえば、アジアの国々で「エイズパニック」が起こった時期で、その頃から次第にセックスワークに対する弾圧が厳しくなりました。セックスワーカーたちは、エイズの温床として見做され、警察による摘発や社会的にも人権侵害が繰り返されました。重大な被害を受けたセックスワーカーたちは、自助グループを次々と発足しました。

セックスワーカーの運動はやがて世界に広がり、1991年に国際的なセックスワーカーネットワーク団体 NSWP が設立され、アンドリューも設立にあたって大きく貢献しました。またアンドリューは、1994年横浜で開催された国際エイズ会議に集まったアジアのセックスワーカーたちとともに、APNSW (Asia Pacific Network of Sex Workers) を創設し、亡くなる直前までこの2つの団体で活動をしていました。

アンドリューは、とても優秀で人間味に満ち溢れた活動家でした。グローバル・ファンドや国連など国際機関の策定する HIV ポリシーに対して、セックスワーカーの人権を無視せず、偏見や誤りを暴き、セックスワーカーに評価させるために尽力しただけでなく、世界の色々な国に行き、セックスワーカーのアドボケーターを育成し、団体運営を助けました。

一方で、アンドリューの活動は様々な妨害も受けてきました。例えば、あるとき、DVに遭っていたセックスワーカーの相談にのり、その人からお礼にコーヒーをいっぱいおごってもらったことで、アンドリューはオーストラリア警察に逮捕されました。当時、アンドリューが活動していた地域では、「他の人が売春で稼いだお金で支援を得ること」を禁止しており、それに違反したから、というのです。この逮捕は不当だということが認められ、その後オーストラリアでは記録も抹消されたのですが、今度はアメリカ当局がその過去の記録を掘り出して、セックスワーカーのネットワーク会議参加のために訪米したアンドリューの入国を禁止したのです。日本もそうですが、アメリカでは現在でも売買春に関係した犯罪歴のある人の入国を禁止しているのです。このように、セックスワークを禁止する国々では、セックスワーカー支援活動もやりにくく、働く人々の現場に介入することは不可能に近く、困難を極めます。

いろいろなことに挑戦し運動を進めてきたアンドリューの活動家人生とその功績を伝え続けることは、セックスワーカーのために活動する人々に大きな学びと気づき、刺激と勇気を与え続けることでしょう。日本でのセックスワーカー権利運動もまた、彼の切り開いてきた道の延長上にあります。アンドリュー、これからも共に、いつまでも。

(アンドリュー追悼文集 <http://swashweb.sakura.ne.jp/file/andrew.pdf>)

